『國民新報』1939年11月5日

[主張]　愛國日自肅　－その日だけでは何にもならぬ！―

　がめられてから、二のが、さる一にはれた。といふをつでは、のがにをかけた、ののそのはしいをあげたといふことであつた。

　さてというふものは、そのだけで、そののはれてもよい、といふものではない。められたそのよりも、ろがなのではあるまいか。のにしたから、そのはいにしまつてもいゝ。[[1]](#footnote-1)といふやうなきひがあつてはである。のへに〝これ″といふことがある。これはなのといふは、一のあつたとか、されたとかにるのではなく々のがけがち『』のでなくてはならないのだ。

　[の]このも一だけにし、そのはさまでしない、といふやうな心がけでは、そのにしたのが、のにもたぬことになる。

　しといふものは、にのきにさるゝもので、でせたやうに、のひもなくりつてれないのもである。

　そこで一に一や二のでは、ともすればれがち、みがち[にも]なるので、一をとめられたのであるから、る十二のそのは、一ののをする。

　さる一ののがことにをしたやうであるが、これはが、したことはであるが、そのとなるが、一にのにしたからである。しそのにぎがつゞけられてゐるとしたら、これはのはなければならぬとなるだらうか。

1. 「しまつてもいゝ。」は『同胞に寄す』では「緩めてしまつてもいゝ、」に変わっている。 [↑](#footnote-ref-1)